

平成21年 4月17日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18530709  
 研究課題名（和文）  
 青木實三郎による「想画」の図画教育実践に関する実地調査研究及び電子データ化  
 研究課題名（英文）  
 A Study of Jitsusaburo Aoki's Drawing Education as Practitioner of "Souga" and the Digital Data Processing  
 研究代表者  
 佐々 有生（SASA SUMIO）  
 島根大学・教育学部・教授  
 研究者番号：50284336

## 研究成果の概要：

本調査研究の目的は、わが国の図画教育界で注目を浴びた青木の図画教育の未調査部分の実地取材等を行い、当面、それらの電子データ化により基礎資料として整備・保存することであった。従前より、可能な限りの当時の資料を精査し、今できる未発表の青木の原稿・児童作品・証言等を記録・保存しておくことの意義は大きいと考えており、ここに青木による図画教育実践の調査・考察等の電子データ化とその刊行に至ることができた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	200,000	60,000	260,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：青木實三郎、想画、図画教育

## 1. 研究開始当初の背景

島根県奥出雲の地で大きな足跡を残した青木による「想画」の図画教育実践は、昭和初期までさかのぼる。現在、彼の貴重な実践資料は、生家や当時の同僚あるいは勤務校等に散在する。青木と同時期に勤務された元同僚の方が高齢ながら今なお健在である。さらには、最近、生家で未発表原稿の存在を確認することができた。それぞれがいずれも価値認識され大切に保管されているものの、今後とも引き続いて個々人等のレベルでそれらを継続的に維持していくには自ずと限界が

ある。今でなければできない聞き取り調査等の生きた資料の整備・保存が急務だった。

## 2. 研究の目的

青木の図画教育実践の貴重な資料等の最善は現物保存にある。しかし、当面の緊急を要する課題として、次のとおり実地調査等をすすめる、その整備・保存等を図ることを目的とした。

- (1) 青木がかかわった「ひと」・「もの」・「こと」等の実地調査
- (2) ビデオ等による聞き取り・未発表原稿等

の電子データ化  
(3) 青木による図画教育実践の基礎資料の刊行

### 3. 研究の方法

本研究では、当面の緊急を要する課題に視点をおき、3年計画により調査研究をすすめることとした。

(1) 初年度(平成18年度)は、事前調査として位置づけ、著述、書画、児童画、人物等、青木にかかわる「ひと」・「もの」・「こと」等の全般にわたって詳細な現地取材等による現地調査を行う。

本研究をすすめるうえで、映像機器等を活用した資料収集は欠かせない。そのために、まず、聞き取り調査や電子データとしての基礎資料を作成・保管できるよう本学研究室における映像記録用の機材・編集機器等を購入し、関係機材等のハード面の整備を図る。本研究に着手するにあたり、電子データとしての基礎資料が作成・保管できるようにするための関係機材等の整備・充実が重要と考える。

調査対象地域は、県北の奥出雲町である。本学より、約70キロの距離の地にある。青木の生家や学校、また、彼に関わりのある人物等の取材を行うには、調査対象となる地域に一定の期間は留まり人間関係を図ることから始めることが大切である。また、現地調査を行う側に立つと、自らの体を運んできめ細かな現地調査をすすめ収録するには、協力者が必要であり、テープ起しや資料の分析・整理等の支援が必要である。

このように、初年度は、現地調査のための関係機材等のハード面の整備とできる限り自らが現地に出かけて実際的な取材による現地調査を行うこととした。

(2) 2年目となる平成19年度以降は、前年度の現地取材等による現地調査に基づき、さらに、青木の実践にかかわりのある多方面の取材を行う。広島高師附小の大竹拙三も青木との結びつきが深かった。「想画」に関する先行研究もいくつかみることができる。そうした青木との関わりのある文献やその取材等も行う必要がある。継続的に横田町の現地取材とあわせて広く他地域での調査を並行的に進めたいと考える。それと同時に、研究室等で取材した資料等の整理・分析等を行う。つまり、それまでの現地調査を踏まえて、ビデオ・カメラ等による聞き取り・現物の映像記録、未発表原稿等の電子データ化に着手する。

(3) 最終年度となる平成20年度では、引き続き継続的な現地調査は欠かせないが、調査等によって明らかにできた現存する資料の電子データを整理し、また、その分析・考察等を加えて集約を図る。そして、青木の図画教育実践や「想画」教育の基礎資料として広

く活用できるよう刊行及びCD等の電子データとしてまとめることとした。

### 4. 研究成果

本調査研究の学術的な特色のひとつは、わが国の図画教育界で注目を浴びた青木の図画教育の未調査部分の現地取材等を行い、当面、それらの電子データ化により基礎資料として整備・保存することにあつた。

青木による「想画」の図画教育実践は、すでに約80年が経過しながら、生家や当時を知る人物等に対して組織的、計画的な手だて・支援は充分にはなされていなかった。それでもなお、青木家や内田家では、今日まで児童画等の貴重な資料が大切に保管されてきている。しかし、このままでは、重要な証言や資料等を失う状況に直面することが危惧される。青木の図画教育実践は、次世代に伝えたい貴重な教育遺産である。従前より、可能な限りの当時の資料を精査し、今できる未発表の青木の原稿・児童作品・証言等を記録・保存しておくことの意義は大きいと考えていた。

(1) 青木による図画教育実践の調査・考察等の大きな成果は、その電子データ化と刊行に至ることができたことである。ちなみに、本研究物の論文構成は、次のとおりである。

#### 第一部 総合的研究編

##### I 島根県馬木村小学校訓導青木實三郎とその図画教育

- 1 はじめに
- 2 郷土教育と図画科における生活化
- 3 青木の図画教育観と「想画」の確立  
(1) 青木の略歴と奥出雲の地「馬木村」  
(2) 「生活画」と「想画」  
(3) 青木の「想画」確立への歩み  
(4) 大竹拙三との結びつきと「想画」としての図画教育観
- 4 おわりに

##### II 青木實三郎の「想画」教育について

- 1 はじめに
- 2 想画教育の確立
- 3 内藤伸
- 4 想画
- 5 結

##### III 青木實三郎と山本鼎の図画教育について

- 1 青木實三郎と山本鼎の図画教育
- 2 山本鼎と青木實三郎の関わり

#### 第二部 自筆原稿編

##### I 自筆原稿「郷土主義児童画教育之体験と主張」

- 1 自筆原稿のデジタル化に当たって

## 2 自筆原稿「郷土主義児童画教育之体験と主張」

- (1) 青木宗一氏による「まえがき」
- (2) 青木の自筆原稿「郷土主義児童画教育之体験と主張」

## II 自筆原稿のデジタル化とその考察

- 1 青木の児童画教育理念としての「郷土主義」と「自由選題主義」
- 2 子どもたちの自然性や活動のよさを認める立場としての「子ども観」
- 3 青木による「指導標準」の内容とその教材配列
- 4 児童画教授の方法

## 第三部 「想画」及び青木の作品編

### I 内田寛一氏所蔵の児童画とその聞き取り調査

- 1 聞き取り調査に当たって
- 2 聞き取り調査の目的
- 3 聞き取り調査の方法と編集
- 4 児童作品と内田氏の聞き取りの実際
- 5 聞き取り調査を終えて

### II 青木宗一氏所蔵の児童画

- 1 青木家所蔵の児童画をデジタル画像化するに当たって
- 2 青木家所蔵の児童画
- 3 青木家所蔵児童画のデジタル画像化を終えて

以上、論文は3部構成になっており、本調査研究の成果である研究物としての刊行は、さらに3つに大別できる。

(2) 第I部は「総合的研究編」とし、青木實三郎の図画教育理念・内容・方法等について研究協力者と分担執筆してまとめた。また、山本鼎や大竹拙三等の青木の教育実践と結びつきのある人物も取り上げ、いわゆる「想画」に関わる全般について論述している。

(3) 第II部は、青木の未発表の自筆原稿「郷土主義児童画教育之体験と主張」を書き起こしデジタル化したものである。本自筆原稿は、「想画」として認められる以前の實三郎の図画教育理念であり、その内容・方法等の論述である。そのことは、本自筆原稿が、「想画」以前の實三郎独自の図画教育のありようを知るうえで貴重な資料になることを意味する。そのキーワードは「郷土主義」にある。つまり、本自筆原稿は、大正期を中心とした實三郎による「郷土主義」の図画教育の実際を明らかにできる唯一の資料として位置づけられ、そこに大きな意味がある。

このように、本自筆原稿は、實三郎の「想画」以前の図画教育をみることができるものの、自筆原稿の前後が散逸しており、完全な

形で残されていないのが悔やまれる。しかしながら、本調査研究での本自筆原稿の一言一句を吟味しながらデジタル化をすすめてきて、改めて十分に實三郎の図画教育に対する熱い理念とその具体的な実践について十分に読み取ることができた。

また、原稿が自筆のため、いくつか読み取りにくい箇所もあったのは事実である。一文字の解読に予想以上の時間をとり、何度も読み返すことによってようやく判読できた箇所もあった。そうした不明点を一つずつ克服し、またお孫さんに当たる青木宗一氏の確認やその他幾人かの誤字脱字等の推敲等の依頼をとおして、できるだけ原稿に忠実なデジタル化に努めた。したがって、青木の自筆原稿は、「想画」に関する基礎資料に十分なり得るものであると自負している。

(4) 第III部は、現存する青木の指導による児童画のデジタル画像化と、その聞き取り調査をまとめたものである。現存する児童画は、現在、内田寛一氏と青木宗一氏の2家族で保管されている。いずれも個人所蔵による保管のため、その全ての作品のデジタル画像化を図り、美術教育史の基礎資料として整備する必要があった。

まず、奥出雲の地において図画教育に情熱を注いだ青木による想画教育の実際について当時同僚だった内田寛一氏の聞き取り調査を行った。そして、その克明な再現を主眼に置き、内田氏保管の児童画を中心に作品のデジタル画像化と各作品の実測調査を行った。そして、内田氏の語りの活字化を図り、作品と併せて編集することに努めた。

現在、内田家には、青木の指導による児童画を大小併せて70数点に及ぶ貴重な作品が保管されている。作品の画面から、当時の馬木の暮らしを一定程度うかがうことができる。そしてさらに、その作品を目の前にした内田氏の語りを加えると、作品に内包されている社会的背景や子どもの生活等、当時の子どもたちの興味・関心・表現意図、児童画のよさ等をより深く理解し味わうことができる。本聞き取り調査をとおして、内田氏の語りは、青木の指導による「想画」について認識を深めるうえで十分に意義あるものだったと考えている。ちなみに、内田氏の聞き取りは、すでに従前より数度行ってきている。しかし、年ごとに聞き取りは困難になっている。その意味では、本調査研究による聞き取りは貴重な記録になると考える。

事実、本調査研究のまとめの最中、本年1月に内田寛一氏の訃報に接した。内田氏には、聞き取り調査において所蔵する児童画を一枚ずつ丁寧に話していただききており、今では再びお聞きすることのできない貴重な語りになった。研究物刊行の折には、お礼の気持ちを込めてお届けするところでしたの

で誠に無念な気持ちである。

そして、次に青木實三郎の実家で保管されている児童画のデジタル画像化を行った。

青木家所蔵の児童画は、台紙に添付されており保管は非常によい状態だった。ここでは、各作品に解説等を加えることはできなかつたが、デジタル画像化により一定程度の永続的な保存ができるようになったと考えている。あくまでも青木の指導による児童画のデジタル画像化だが、青木自身による作品も併せて掲載することとした。

作品をまとめるに当たっては、実際に作者にお話を聞かせていただいたり、描画場所等を訪ねたりすることができた。当然ながら、現在の馬木の地域一帯は、青木が指導した当時とは風景等の状況は大きく変わってきている。少しでも青木の児童画指導や馬木の地域等の理解の一助になるよう、調査中の記録写真の中からいくつか児童画に添付して掲載した。

こうしたことにより、内田家及び青木で所蔵されている児童画と青木自身の作品は、ほぼデジタル画像化できたと考える。

したがって、彼の指導による児童の全作品は両家で所蔵されており、その意味では現認できる全ての児童画のデジタル画像化を果たせたことになり一定程度の継続的な保存を可能にしたことが大きな成果と考える。そして、青木の未発表原稿と併せてデジタル化し、美術教育の史的研究の基礎的資料のひとつとして今後活用されることと考える。

今後もさらに、青木の指導による児童画等の資料の調査研究をすすめ、もし新たな作品等が明らかになればデジタル画像化を図りたいと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

①都築邦春，青木實三郎の「想画」教育について，埼玉大学紀要 教育学部，第 58 巻 第 1 号，pp. 31～41，2009 年，査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

①佐々有生，青木實三郎による「想画」の図画教育実践に関する実地調査研究及び電子データ化－美術教育のリアリティーを求めて－，2007 年度日本教育大学協会全国美術部門中国地区研究集会<山口大会>，2007 年 6 月 9 日，山口大学

〔図書〕(計 1 件)

①都築邦春，大正期芸術教育運動の研究，2009 年，p. 254

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐々 有生 (SASA SUMIO)  
島根大学 教育学部・教授  
研究者番号：5 0 2 8 4 3 3 6

### (2) 研究分担者

都築 邦春 (TSUZUKI KUNIHARU)  
埼玉大学 教育学部・教授  
研究者番号：6 0 0 0 6 5 8 3

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：